

神戸から宮城へ

兵庫県こころのケアセンター
センター長 加藤 寛
(みやぎ心のケアセンター 顧問)

震災の年の11月から毎月のように気仙沼に行っている。定宿としているホテルが港を一望する丘の上に建っているため、否が応でも被災地の変化を定点観測することになる。道路だけがかさ上げされ、その周囲の土地のほとんどは手つかずのまま、いまだに撤去されない建物も数多く残されている光景を見ると、被災者ならずとも深い絶望を抱いてしまう。それは、私が見てきたどの災害とも異なっている。阪神大震災の2年後の被災地では、倒壊した阪神高速の復旧など急速に公共インフラの整備が行われ、復興公営住宅への入居も始まるなど、確かな復興の兆しが見えていたし、四川大地震後の被災地では、もとの建材と煉瓦を使って（当局は禁止していたらしいが）、自宅を再建しているしたたかな被災者がいた。

復興が実感できない状況の中で、被災者支援を行っていくことは、焦燥と無力感を伴う仕事である。というのも、生活の基盤を取り戻すのが、心理的回復の礎になるからである。また、多くの支援者自身が被災し、家族や仲間を喪っていることを考えると、今回の震災における被災者支援の困難さは誰の目にも明らかである。

みやぎ心のケアセンターに被災地の内外から参加したスタッフにとって、復興がなかなか見えない状況の中で、立場も役割も曖昧な仕事を進めていくプロセスは、困惑、焦燥、無力感など、さまざまな感情を引き起こしただろう。振り返ると、18年前、神戸に集ったスタッフも似たような状況に置かれていた。社会的な期待は大きいのに、関係機関には鬼っ子扱いされ、何から手をつけていいかわからない日々の活動をとおして感じた葛藤の大きさは、初年度の報告書のタイトルに「手探りの一年」という副題が付けられたことが象徴的に物語っている。

寄せ集めの集団が、さまざまな書式、資料、通信環境の整備から始めて、被災地の状況に合わせて活動方針を修正していく、そして何よりも関係機関との連携を深めていくという、この1年間のプロセスは、戸惑うことばかりだっただろう。しかし、これらの地道な仕事をこなしながら、着実に地域に浸透している姿を見ると、それぞれのスタッフの能力とモチベーションの高さに感服する。何より燃え尽きによる一人の退職者も出していないことは奇跡的である。

一つ一つの災害は、被災状況も復興過程も異なる。過去の災害の情報が役に立つこともあれば、まったく参考にならないことも多いだろう。また、東日本大震災では東北3県の抱えている問題には大きな違いがあるし、宮城県内でもそれぞれの地域の状況には差がある。時間とともに変わる被災者のニーズに柔軟に応えながら、方針を変えていくことが求められ、そのプロセスを記録し後生に伝えることが、何よりの社会の財産になるのであろう。スタッフ諸氏の今後の活躍にエールを送りたい。